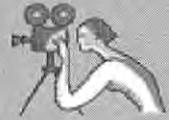




ぷらっとシネマ デジタル世界と化したアフガニスタン『君のためなら千回でも』（マーク・フォースター監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15468">http://hdl.handle.net/10466/15468</a>



## デジタル世界と化したアフガニスタン

『君のためなら千回でも』(マーク・フォスター監督)

1978年冬、アフガニスタンの首都カブールの空にたくさんの凧が舞う。恒例の凧揚げ合戦に参加した12歳のアミルは、住みこみ使用人の息子ハッサンとともに巧みな糸さばきで優勝する。凧を拾いに行ったまま戻らないハッサンを探すうちに、彼が不良少年たちにいじめられる現場を目撃するアミルだが、見なかったことにして帰宅してしまう。それ以後、二人は言葉を交わすことなく日が過ぎる。ハッサンと顔を合わせたくないアミルが盗難事件をでっちあげる工作までした結果、ハッサン父子はアミルの家を出ることになる。翌79年、ソ連によるアフガニスタン侵攻が始まり、立場の危うくなった父とともにアミルはアメリカへと出国する。それから約20年後のある日、いまはサンフランシスコで平穏に暮らすアミルに、パキスタンにいる知人から電話が入る。ハッサンのその後を知らされたアミルは、かつて自分がした裏切りを償うために、アフガニスタンを訪れる決心をする。タリバン政権下にある故国での旅路の果てに、アミルはハッサンの残した息子ソーラブを探し出す。この少年をアメリカに連れ帰り、家族として迎えたアミルは、やっとハッサンの信頼と友情に応えることができる気がしている。

世界で8百万部を売ったカーレド・ホッセイニの小説を映画化した本作は、アカデミー賞にもノミネートされた話題の「感動巨編」である。「感動巨編」とされるのは、アミルが20年の時を経て自らの罪を償い、一度は失ったと思った信頼と友情の絆を、危険も覚悟でとりもどす物語だからということだろう。

しかしこの物語は、いくつもの点で信用ならない。まず、アミルとハッサンの関係を信頼と友情の絆だとするのはどうか。ハッサンはアミルの家で働く使用人の息子であり、ハッサン自身が給仕の仕事をするシーンもある。アミルは、主人の権力を使って工作することで使用人父子を追い出したのであり、その行為は対等な友人に対する裏切りとは異なる。友人への裏切りは友人の遺児を育てることで償えるかもしれないが、主人が使用人の遺児を育てることで回復できる友情はない。

つぎに、タリバン政権下のアフガニスタンを行くアミルが、けっこうすんなりとソーラブを見つけだしたり、タリバン幹部がかつてハッサンにい

じめた不良少年だと判明したりと、偶然が重なる因縁話のような筋立てが白々しい。

要するに、ここでアフガニスタンはロール・プレイング・ゲーム(RPG)のようなものと化している。20年ぶりに帰国した青年が、デジタル世界を旅するなかで、いくつもの危機を乗り越えて、最後に大切な人を救出し、幸福が約束された国アメリカへ連れ帰れば、RPGは完結する。むろん現実のアフガニスタンはRPGではない。ソーラブとアミルがアメリカへと去ったあとも、人々の生活はそこで続く。ソーラブにしたところで、アメリカでの幸福が約束されているという保証はない。

ハリウッドがつくるデジタルなアフガニスタンを見ながら、では私たちはスクリーンに映じるどんなアフガニスタンをほかに知っているかと考えてみた。日本社会に住む私たちの映画の経験は、アメリカやフランスについてはそれなりの厚みがある。また、中国、ヴェトナム、ブラジル、ユーゴなど、訪れたこともなく言葉ができなくとも、映画を通して知ようになった国はほかにもある。しかしアフガニスタンについての私たちの映画の経験はごく少なく、アフガニスタン出身の映画人の手になるものといえばS・バルマク監督『アフガン零年』(03年)くらいだ。『カンダハール』(01年)、『迷い犬』(04年)など、危機のアフガニスタンを描いた名作とされる作品は、イランの映画人マフマルバフ一家によるものだ。マフマルバフがどんなに優れて誠実な映画人であっても、アフガニスタンとは比較にならないほど豊かな映画大国イランの人であることを忘れてはならない。アフガニスタンについての私たちの映画の経験は、現在のところ他者の目を通してつくられた作品に依存している。

凧揚げ大会の日、「君のためなら千回でも凧を拾いに行つてあげるよ」とハッサンは言った。20年後、アメリカにやって来たソーラブを凧揚げに連れだしたアミルが、同じ言葉をソーラブに言つて映画は終わる。しかし、いまソーラブの凧が舞うのはカブールの空ではない。タリバン政権は倒れても、アメリカの軍事介入以来、政情不安の続くアフガニスタンに、子どもたちが心おきなく凧揚げに興じる日はまだ訪れない。

(アメリカ、2007年、129分)